
最後の鴉は何を思って飛ぶ...

いつでもどこでも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の鴉は何を思っ て飛ぶ…

【Nコード】

N7323X

【作者名】

いつでもどこでも

【あらすじ】

とある世界。

その世界である男が死んだ。

秩序を重んじる企業のためではなく、

また自由を勝ち取る組織のためでもない。

お互いに笑い合える世界のために死んだ。

自らの羽にその罪を全て乗せて… …

だが、鴉は落ちる事なく再び空を舞う。

その時、鴉は何を思うのか…
…
…

注意!!

作者はラストレイブンの話しは殆んど知りません。人づてに聞いた事があるくらいの知識しかありません。

ISにいたっては原作すら読んでません。

「設定と違うのヤダ」とか「原作遵守」っていう方にはオススメしません。

それが大丈夫な方はどうぞ。

P S : 特にA C ファンの方々にはオススメしません。

ブログ 最後の鴉（前書き）

やってしまった… …

ISの作品を見てたらつついっつい書いてしまった… …

ちなみにラストレイブンの世界観は色々とメチャクチャです。

ISの世界観もまた然りです。

それでも良いのなら見てやってくださいな。

プロローグ 最後の鴉

——とある世界。

その世界である1人の男がいた。

男はその世界で最強を誇る兵器、ACを駆り、傭兵として、レイヴンとして生きてきた…

——男は戦い続けた。

その類い稀なる才能と一切の妥協を許さぬ鍛練によって 最強の傭兵 となり、敵には恐怖を、味方には畏怖をされながら…

——皆は男を嫌悪し、侮蔑し、罵った。

人は男を『金の亡者』と、『金で人を殺す人でなし』と言って男を批難した。

その中傷を彼は否定せず、また肯定もせず、男はただただ戦い続けた…

——男には守りたいものがあつた。

男は別に金が欲しかった訳じゃない。

不当な暴力による愛する者への生命の危機。圧倒的弱者への一方的な暴力的危害。

それを見過ごす事はできない優しい心の持ち主だった。

だから男は守るために戦った。

皆んなから、助けた相手からも『人殺し！』と、言われながらも…

——男は一人になった。

男は皆んなを守るために皆んなと戦い続け、いつしか男は一人になった。

己が権益と権力を守るために他を犠牲にする「アライアンス」と敵対し、それを打倒するために他を犠牲にする「バーテックス」とも敵対した。

22人いたレイヴンは自分一人となり、味方は誰もいなくなった。そして男はみんなを守ったその功績を 狂気の所業 と貶められ、人々から断罪されようとしていた… ……

「よつこらせ、イテテテ… ……」

誰もいない、ビルも何もかもが倒壊している灰色の廃墟の街の中で、俺は丁度人が1人よりかかれる瓦礫に座り込んだ。

だけどその時に脇腹の傷が開いちまった。

少し血が滲み出てきやがったぜ… ……

「ふう… ……これが最後のレーションか… ……」

だがこの程度の傷でどうにかなる俺じゃねーんだなコレが。
俺は懐に手をのばしてレーション保存食を取り出して頬張る。

「くううう… ……まっつつつず!!」

相変わらず吐き気を催す程の不味さだ。

最期のメシだから精神的作用で少しはマシになるかと思ったが、寧

る最期のメシがこんなゲキ不味いものだと思うと余計にツライ。
ダメージ2割増しだな。いらねえ・・・

「やば、さっきの声で傷がかなり開いちゃった」

さっきの「まっつつず!!」で傷が開いちゃったぜ。
血がどくどくと流れてきやがった・・・

「まあ…今更そんな事気にしても仕方ねーか…」

脇腹の傷以外にも俺の体にはあちこちに傷がある。

それこそ、致命傷一步手前のものなんてザラにある。

それにもう俺は長くねえ。

見た目もそうだが中の方も相当グチャグチャになっている。

よく今まで生きてきたな俺。すこし感心。

「……………」

改めて自分が死ぬ事を思うと心が静かになる。

「アライアンス」と正面きってぶち当たったし、「バーテックス」
のジャック・Oとも正々堂々と殺りあった。

それも全て子供たちや次の世代を担う者たちのために。

結果、俺は皆んなに追われてこんなザマになっているが後悔はねえ。

別にヒーローになりたくてやった訳じゃねーし、傭兵なんて仕事選んだ時点で皆んなに恨まれるのは分かっていたことだ。

【狂気の夜】なんて通り名も付けられちゃったしな。

「そついえばお前にも色々と苦労かけたな。 【夜】： ……」

俺は目の前で俺と同じようにビルでよりかかっている真っ黒い機械に語りかける。

【夜】は俺の使うＡＣの名前だ。

俺がレイヴンとして働いた時からの仲であり、色々な苦難も一緒に乗り越えてきた相棒だ。

だが、無理に無茶を重ねてきた結果、ボディは所々穴ぼこが空き、右腕は配線コードが繋がっているだけの状態。

左腕も何とか形を保っているだけ、という、みるも無惨な状態。

「思えば色んな無茶をお前にさせてきたな．．
済まねえな。こんなだらしない相棒でよ………」

『……………』

俺は相棒に語りかけるが、勿論答える訳がない。

それでも俺は相棒が『気にするな』と言ってくれたように思えてならない。

自己満足だと思っなら言ってくれ。別に否定はしねーぜ。

「ん？とうとう来たか……」

空気中から伝わって俺の鼓膜が震える。

地面に座っている所から僅かな地響きがする。

どうやら軍用ヘリと戦車が来たみたいだな。

この感じからすると、それぞれ30機はいるな……

普段なら取るに足りない相手だが、他の人たちを省みない「ろくでなし」は俺が全部ぶっ潰した。

今の軍部はしっかりとした良識を持った人たちしかいない。

だから俺は抵抗しない。というかできない。

足の骨はキレイに折れて肋骨は半分以上が折れている。

腕の骨も折れているし、これじゃ逃げることもできない。

「それに……すこし、眠い……」

さつきから異様に睡魔が襲ってくる。

勿論これで寝てしまったら二度と目覚めない眠りなのは分かっている。

だが眠い。もうこれ以上目蓋を開ける事ができない。

「もう……限界だ……。ここが、俺の最期か……」

だが……悪くはない……。ああ……本当に悪くない、最……」

……だ……」

後悔なんてしてない。

あるとすれば救えなかった命があったこと。

俺の…、この【狂気の夜】の命を以ってしてこの世界は平和になる。
子供達が笑いあう、優しい世界へとなる。

これで…これで良いんだ…。

俺は睡魔に抗う事なく、ゆっくりと、そして静かに、二度と目覚める
ことのない眠りへ落ちていった…。

スッロン・レイヴン
こうして 最強の傭兵 であり、 ラスト・レイヴン
最後の傭兵 である彼は深い眠
りについた。

その顔はとても晴れやかで、とても満足していた表情だった。

——だが、後に彼を追ってきた軍は彼の死体も、彼の機体も発見
出来なかったと上層部に報告した。

ブログ 最後の鴉（後書き）

いかがでしたか？

私は原作を読んでいないのでISの世界観も結構好い加減です。

あるとすれば他の作家さんが書いたものでなんとか理解しています。
応援よろしくお願いします。

新しい生

「ん~~~~! …… …… もう朝か ……」

眩しい朝日が俺の顔めがけて差し込む中、俺は気だるい雰囲気を出しながらも目を覚ました。ボサボサの髪は適当に手ぐしで整え、体をグツと伸ばして体の中にある眠気を追い出す。

(…… …… そろそろ髪切るか …… ……)

結構長くなってきた髪の毛を掴んで、そんな事を考えながら俺は一階に降りた。

~~~~~

「おはよう …… ……」

一階に降りて、リビングまできた俺は朝の挨拶を言う。だが、その挨拶を返してくれる人は誰もいない。まあ、そんな事は分かっているから俺は気にしない。

俺はそのまま台所に向かい、炊飯器の保温機能を切り、冷蔵庫から

卵を取り出して卵焼きを作る準備をする。

その間に残ってある味噌汁を火にかけて、ご飯をよそう。

あとは卵焼きを作って、温めた味噌汁もよそってはい出来上がり。  
俺の朝メシはあっという間に完成。

その後リビングに戻って俺は朝メシを食べた。  
勿論ちゃんと「いただきます」と挨拶したぜ。

誰も返してこないがな…

「… うん、今日も上々の出来だ」

俺は自分の作った料理に自分で評価しながらメシを食った。

お、今日の卵焼きは一段と美味いな。

あいつらにも食わしてやるか…

~~~~~

朝メシが終わったあと、俺は洗面台に立って身なりの確認をする。
と言っても寝癖を直すだけなんだけどな。

「……………」

寝癖を直し終わったあと、俺は自分の顔を見る。
日本人特有の黒い髪。キリッとした目付き。

幼なさはまだまだ残っているが、その顔は前世の俺の顔と同じだった。

そつ、みんなはとくに分かっていたと思うが、俺はあの時に死んだはずの男だ。

前世の名前は思い出せねーが、今は真鴉まがらす 黒羽くろはつつ名前なまえで生きている。

なんでこんな形で生まれ変わってるのか俺にも全く分からねえんだわ、コレが。

あの時強烈な眠気に誘われて眠っちまったんだが、気が付いた時には子供になっていたんだよ。

あ、ちなみに両親はいねえ。

なんでも俺は捨て子だよ。

まあ悲しくはなかったし、俺には知ったこっちゃねえからな。

伊達に前世じゃ三十路ギリギリなんだからな。

で、俺は神社の前に捨てられてたらしく、神主さんが俺を引き取ってくれたんだ。

最初是一緒の家に住んでいたんだが、そこはアレだ。所謂“多感なお年頃”ってやつで別宅で1人ですんでいる。

ん？さつき三十路ギリギリって言ってたのに多感なお年頃は可笑しいんじゃないかって？

分かってないなあ。前世は前世。今世は今世だ。

詭弁だつて？何とでも言え。

まあ、俺の事についてはそんな所だ。
にしてもこの世界はスゲえぜ。

前世の俺がいた世界とは全く違う。

賑わう人々。生い茂る草木。当たり前のように飲める水。

そのどれもが俺のいた世界とは真逆。

いい世界だ…俺が命を捨てても成したかった世界がここにはある。
俺のいた世界も長い長い時間をかければこんな世界になんのかな…

…

「………つていけねえ！」

もうこんな時間が、早くしねえと遅れちまう！」

ふう、ついつい考え込みしまったぜ。

今日は道場に行かなきゃいけないんだ。

俺の幼馴染達が剣道やっててよ。それに俺も付き合ってるんだわ。

レイヴンだった頃の俺はブレード主力の戦法だったからな。

ブレードでACを破壊するのは勿論、爆撃機を斬ったりもした、

それに比例して俺自身の剣の腕も相当なもんになった。

ちなみに俺も射撃はできるがあまり好きじゃないから滅多な事では使わなかった。

「さてと、準備は出来たし、さつさと向かいますか」

時間はまだ全然ある。これなら歩いて行っても大丈夫だ。

幸い、この家と道場は歩いて十分もかからない程の距離なんだ。

俺は荷物を持ち、鍵をかけて、道場に向かった。

「——つと、卵焼き………」

まずいまずい。卵焼きを忘れてしまった。

~~~~~

「よお、待ったか？」

時間には間に合ったんだが既に2人は来ていた。  
俺は2人に声をかける。

「あ、黒兄。全然待ってないよ」

「今日もよろしくお願いします！師匠！」

答えたのは1人の男の子と女の子。

男の子は気楽な感じで手を振り。

もう1人の女の子はガバツと頭を下げる。

手を振る男の子の名前は織斑 一夏。

俺と同じ捨て子で姉弟2人で暮らしている

頭を下げる女の子の名前は篠ノ之 箒。

俺を拾ってくれた神主さんの娘さんの1人。

こつちにも姉が1人いる。  
ちなみに箒は一夏に惚れてるんだぜ。  
いいねえ、青春だねえ。

「一夏。俺を黒兄と呼ぶな。俺とお前は同い年じゃねーか。  
それに箒。お前も俺を師匠と呼ぶな。  
むず痒くてかなわねー」

だがこの2人は俺の事を黒兄と師匠と呼ぶ。  
まあ前世の記憶持つてるから他の奴らより大人びているのは認める  
が同い年である以上あまり呼んでほしくない。  
箒の方も以前俺が剣道を教えた時に目を輝かせて「師匠!」と呼ぶ  
ようになった。

俺は師匠なんてガラじゃねーからムズ痒いんだ。

「うん、わかった黒兄」

「で、でも師匠に教えてもらってから格段に強くなりましたし…。  
だから師匠は師匠なんです」

一夏、あとで殴る。

それと箒。俺の剣は人を殺す剣であってお前達のような剣ではない。  
だから俺を師匠と仰がないでくれ。

「ふう…分かった。今日のところは一先ず許す。」

だが、これ以降はあまり呼ぶなよ」

まあ、いつか時間が解決してくれるか。

2人も成長したら俺を黒兄や師匠と呼ばなくなるだろう。

「さて、んじゃ早速やりますか。

はいはい2人とも所定の位置に着いて」

手をパンパンと叩きながら、俺は2人を道場の中央に誘う。

2人を打ち合わせ、それを見た俺が改善点を2人に教える。

これが俺の指導の仕方だ。

俺の剣は邪道だからな。そんなもんを教えたら2人の剣の型が崩れちまう。

それだと本末転倒だろ？

「よし、それじゃあ2人とも… …始め!!」

「「ツツ!!」」

俺の声を合図に2人は飛び出した。

それからはお互いに竹刀の小気味いい音を響かせながら存分に打ち合った。

うんうん。2人の年を考えれば相当に上手いな。まあ、年を考えれば、だけどね。

~~~~~

「2人ともそこまで!!」

それから約一時間程、俺の合図によって2人の剣戟は終わった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「ふう……ふう……ふう……ふう……」

終わるや否や、2人は床に座り込んで肩で息をする。
全くこの程度で情けない。2人とも鍛錬が足りないな。

「休んでる暇はないぞ。」

早速2人に改善点を教えるからすぐに立つんだ」

「お……鬼……」

「師匠……き、厳しいです……」

「何を言っただ。2人とも鍛錬が足りないからそんなザマになるんだ。」

それに無駄な動きも多すぎる。
それを教えるから早く立て」

渋る2人を俺は無理矢理立たせる。
本当に鬼だつて？なんとも言え。

2人は俺には「強くなりたい！」って言ったんだぜ？
こんなんで音を上げるような生半可な覚悟はドブにでも捨てちまいな。

2人が強くなりたいなら俺は鬼にでも悪魔にでもなるぜ。

「まずは一夏からだな。

体捌きや足捌きはこの前より良くなっている。
そのまま技術の向上を目指すように」

「はい！」

「だが、お前は剣の部分だけを見過ぎだ。

剣ばかり見てて簾の攻撃に対応できてない所が多々あった。
最初の頃は難しいが、もっと全体を見るように心掛ける。
そうすれば剣だろうが銃弾だろうが余裕で避けられる」

「じゅ、銃弾はさすがに無理… ……」

何を言うか。

鉛弾やエネルギー弾。はてはグレネードランチャーまで飛んでくる
弾雨の嵐が押し寄せる… ……

俺はそんな世界で生き残ってきたんだぞ。

銃なんて指の動きを見れば普通に避けられるぞ。
無理なら死ぬだけだな。

「次に筭。」

一夏程ではないが、体捌きや足捌きは良くなってきた。
それに、段々とだが全体を見る事に慣れだしている。

このまま相手全体を見る事が出来るように目指すんだ」

「ありがとうございます！師匠！」

「だが力みすぎだ。」

男の一夏に張り合おうとする気持ちは分かるが、力みすぎで逆に威力がない。

力を入れるのは相手を斬る時のほんの一瞬でいい。

それ以外は力を抜け。力を抜けば抜く程、剣の一撃は鋭くなり重くなる。

その気になれば鉄塊をも斬る事が出来るぞ」

「し、師匠……鉄塊はいくらなんでも………」

そうかな？

さすがに竹刀では無理だが、本物の刀なら斬れるぜ？

竹刀だと木板が限界だな。

「ま、鍛錬を続ければその内分かるさ。」

よし、俺が少し手本を見せちゃう」

そう言っただけ俺は竹刀袋から竹刀を取り出す。

だが竹刀の長さは2人の持つ竹刀より遥かに長く、全体の長さは150cm程で今の俺の身長と同じくらいの長さを誇っている。

「わあ！黒兄が竹刀をとった！」

「久しぶりに見ます！」

それだけなのに2人は目を輝かせている。

そう言えば2人には俺が竹刀を持っている姿はあまり見せていなかったな。

「ほらほら、2人とも危ないから離れている。当たっても知らんぞ」

2人を道場の壁際の座らせて俺は精神を集中させる。

深く息を吸って、吐いて、一回…二回…
…三回…
…
…。

身体中に酸素が行き渡り筋肉の緊張がほぐれる。

自分の筋肉が液体のようにドロドロになる錯覚を覚える。

よしよし。いい感じだ。

これで
ツツ

「せいっ!!！」

光芒一閃

ドロドロになった俺の筋肉は光を超える速さで一本一本の筋に戻り、俺の足は爆弾が爆ぜたように一瞬で踏み込む。頭から振り下ろす竹刀は鋭い風切り音と共に床に着く。そしてその後に残ったのは一切の音が存在すること許さぬ静寂だった。

「す… … すごい… … …」

「… … … (くくくく)」

唯一この静寂の世界で声を発する一夏は俺の動きを見て感嘆の声を漏らし、

箒にいたっては声も発する事ができず、首をこくこくと縦に振って一夏の言葉を肯定する。

その姿を見て思わずカワイイと思ってしまった。

いまロリコンだと思ったやつ、

自宅にコジマ粒子を送りつけてやる…。

もちろん着払いだ。安心しろ。

「とまあ、こんな感じだ。何か質問はあるか？」

「すごい黒兄！ロじゃあ上手く説明できないけど、とにかくすごいえー!!」

「一瞬、師匠の動きが見えなくなりました… …」

一夏は直感的に俺の技術の本質を見抜いたらしいな。

箒は一部分だけだが俺の動きが見えたのか。

2人とも剣の才能なら俺と同等、若しくはそれ以上だな。

未恐ろしい2人だぜ……。

だが、まだまだ負けるつもりはねえがな。

「まあ、しっかりと鍛錬すればこれくら——ッ!？」

——殺気っ!!

「——ふんっ!!」

「シッ!!」

突如俺の頭目掛けて振るわれた竹刀を俺は横薙ぎに払って弾く。

「ちっ…惜しかったな…」

襲撃者はすぐさま後ろに飛び退いて俺の剣の射程から離脱する。
舌打ちしながら俺を睨む襲撃者の正体は…

「はあ…また貴女ですか…千冬さん」

長い黒髪をなびかせ、10人中10人が美人と言っだろう美しい顔立ち。

一夏のただ1人の肉親にして姉の織斑 千冬さん。

ちなみに精神年齢では俺の方が圧倒的に上だが、肉体年齢では千冬さんの方が上なので“さん”を付けている。
今では敬語も普通に使えるんだぜ。

「やはり黒羽を討ち取るのは一筋縄ではいかんな…」

「いきなり死角から襲われる俺の気持ちを考えて欲しいんですが…」

一回千冬さんに剣を教えた時に、その延長線上で模擬戦をしたんだが、その時に俺が勝っちゃってよ。

それ以来千冬さんは対抗心を燃やして俺に仕掛けてくるんだわ。
毎回毎回死角から襲われる俺の気持ちを考えて欲しいぜ…

「断わる」

わお…見事な即答。

中断構え

千冬さんは正眼の構えで俺を見据える。

そしてお互いに相手を見据えて数分。

千冬さんが動いた。

「はあっ!!」

「——ふっ」

千冬さんは俺の胴体目掛けて竹刀を振るう。
俺は縦に斬り上げてその斬撃を弾く。

「くっ!」

「そこ!!」

竹刀を弾かれて隙が生まれた所に俺は竹刀を振り下ろす。
これが俺の戦い方。
長い得物によって相手より長い間合いを誇り、その間合いに入ってきた相手の得物を弾き、その弾かれた隙を斬る。
俺が前世で培った、あの混乱とした世界で生き残るために編み出した俺だけの技。

「この……程度で!!」

「うおっ!?!」

だが千冬さんはその決定的な隙を円を描くような綺麗な足捌きで覆す。

そのまま回転の力を利用して俺に逆袈裟斬りを放つが、俺はすぐさ

ま後ろに飛んで回避する。

まさか自分の剣を届かせるために、敢えて退かずに向かってくるとはな… …

やっぱり千冬さんはスゲえな。

ちよつと驚いたぜ。

「危ない危ない…。もうちよつとで一撃もらう所だった… …」

「ふん。そんな余裕の表情でよくいう。

この程度の攻撃…、お前なら造作もなく躲せるだろう」

それは買い被りつてやつだぜ。

今の攻撃はそれなりに焦ったんだぜ。

千冬さんの才能は本当に凄い。

あれは俺よりもあるな。あと十年もしたら追い抜かれるんじゃないか？

「そこまで過大評価しないでください。

それにしても千冬さんは日に日に強くなってきましたね。

どれ、俺もちよつとだけ本気を出しますか」

でも、一夏も筈もそうだが、千冬さんにも負けてやるつもり毛頭ない。

今はまだ俺が最強を名乗らせてもらう。

俺は自分の中にあるスイッチを入れた。

「——っ!!」

俺の雰囲気が変わった事に気付いたのか、千冬さんは表情を一層険しくする。

だが、こうなっちまった俺は並大抵の事じゃ止まらねえぜ？

「出来るだけ長く持ち堪えるんだ——。
せいっ!——はっ!!」

俺は瞬時に千冬さんを俺の間合いに入れて斬撃を繰り出す。

その数は2つ。一息の内に左右から2つの斬撃が千冬さんを襲う。

「くっ!……このっ……」

ほお…、あれを防ぐか……。さすが千冬さんだ。
なら、これならどうだ？

「そら、まだまだ行くぞ——。
シッ!——ふんっ!——どらっ!!」

今度の斬撃はその数を増やして3つ。
袈裟斬り、胴斬り、逆袈裟斬りの順番で千冬さんに襲いかかる。

「っ！… …まだまだ！… …——あっ！？」

だが、最後の逆袈裟斬りを受ける時に千冬さんの手から竹刀が弾き出された。

まあ、あれだけの攻撃を受けたら手の力も保たんわな。逆によく堪えた方だ。

「… …これで終わりですね」

「ああ… …私の負けだ」

切先を千冬さんに向けて試合終了。

こうして俺と千冬さんの戦いは幕を閉じた。

~~~~~

千冬さんとの試合が終わったあと、俺たちは仲良く4人でわいわいやっていた。

「千冬姉もすごかったけど黒兄もすごいな！」

途中から竹刀が見えなかったぜ!!」

「すごいです師匠!!」

2人は目をキラキラさせながら俺を見つめる。  
ヤメろヤメろ……。…。

そんな真っ直ぐな眼差しを向けないでくれ。  
眩しすぎるぜ。

「本当に黒羽は強いな。  
後半は手も足も出なかったぞ」

千冬さんは俺の事を褒めてくれる。  
こんな美人さんに褒められると少し照れるな…。

「千冬さんだつて強いじゃないですか。  
最近はメキメキと上達してきましたし、あと十年もしたら追い抜かれますよ」

「それは嬉しいことを言ってくれ。  
これも優秀な師匠がいたからこそだな。  
なあ、師匠？」

千冬さんはそう言って意地悪そうな笑みを浮かべる。  
この人、俺が師匠と呼ばれるのがイヤなの知ってて言うてくるんだ

もんなあ……。

「やめて下さいよ。」

別に、俺はただ「力を抜け」と「相手の全体を見る」としか言つてませんよ。

師匠らしい事はしてません」

「だが、お前の指摘があつたからこそ私はここまで強くなつたんだ。まだまだ黒羽には勝てないがな。」

お前には本当に感謝している。ありがとう」

飾り気のない言葉で千冬さんは感謝の言葉を言う。

その純粋な笑顔と真っ直ぐな瞳に思わず見惚れてしまった。

「ゴホンッゴホンッ!!」

話しはそれくらいにして。

今日の朝メシで卵焼きが上手く焼けたんだ。  
皆んなで食べよう」

「本当!?!」

「師匠の料理だ!!」

顔が紅潮しているのがバレないように咄嗟に話題を変える。

幸い2人はこの話題にすぐ釣れた。

だけど千冬さんだけは「むう」と頬を膨らまして不機嫌な声を出す。

くそ。可愛いじゃねーかコンチクショウ。

「それじゃいただきます！」

「あ、コラ！ズルいぞ一夏！」

そんな俺の葛藤も知らずに2人は卵焼きをパクつく。  
呑気でいいなあゝ…

「ほら、千冬さんも…」

俺はなんとか千冬さんの機嫌を直してもらったために卵焼きを千冬さんに差し出す。

「ああ…。いただく」

千冬さんもただどしくはあるが卵焼き掴んで口へと運ぶ。

「…美味しい」

短く、それでいて確かな言葉が聞こえた。  
よかった。これで「不味い」なんて言われたらトラウマもんだぜ。

「お前は本当に料理が上手いな。  
見かけによらず、意外な特技だな」

「一人暮らししてますから。  
それに“見かけによらず”は余計です」

そんな軽口を言い合いながらも楽しく時間は過ぎ去っていく。

筈だった――

「――クウウウロくうううん!!!」

「うげえええええ!?!」

突如ウサ耳が現れた。

比喩なんかじゃなく本当にウサ耳を付けた奴が現れた。

しかも俺の鳩尾に向かってヘッドダイビングしながら飛来してきや  
がった……。

マジで痛ええ… …

「超天才美少女。束ちゃん参上!!」

俺の鳩尾に飛来してきたウサ耳は俺の事などなんも気にせずに、まるで特撮ヒーローの登場シーンをマネするように叫ぶ。

こいつの名前は篠ノ之 束。

篝の姉にして生粋の天才… もとい天災であり、自分の興味のないものには何処までも無関心になる人格破綻者。  
まあ俺からしたらただの変態だ。

ちなみにこいつは千冬さんと同じ年だが俺はこいつにだけは敬語は使わねえ。

「あ、クロくん今失礼な事考えているでしょ？」

「別に、俺はド変態がやってきたなあって思ったのと、俺の鳩尾に激突してきたこの痴女を今すぐにでも斬りたいと思っただけだ」

「はっ!? 変態って呼ばれた! その後に痴女とか言われた!」

「安心しろ、他意はない」

「ううう…。ちーちゃん…。…。クロくんがいぢめるよおお…。反抗期だよおお…。…」

そんな事を宣いながら千冬さんに泣きつく。

分かったと思うが俺はこいつがキライだ。

こいつは色々な発明をしているんだが、その狂気の産物をよく俺に試す。

なんでも俺が「他の人より頑丈だから」っていう理由でこつちとしては勘弁してもらいたい。

「で、お前は どうしてここに来た？」

千冬さんは束の目的を聞いたです。  
もしかたよく分らんもんを俺に試そうとするのなら斬る。

「うんとね、それはね。」

クロくんの手料理の匂いがしたから駆けつけてきたの」

「——チッ」

「なんか舌打ちが聞こえた!？」

「碌でもない用件だったら斬ろうと思ったただけだ。

惜しい……」

「なんか平然とクロくんが怖いこと言ってるよおお……」

束はヨヨヨと言いながら泣く。まあ嘘泣きだけどな。皆んなも馴れたもんで華麗にスルーする。

「まあ、俺の料理を美味しいと言ってくれるのは素直に嬉しいからなほら、食えよ。そしてさっさと研究に戻れ」

好い加減このやり取りも飽きたので東にも卵焼きを差し出す。  
東は俺を色んな騒動に巻き込んでキライだが、嫌いじゃねえ。  
俺もなに言ってるかわからねえが、キライと嫌い。この違いをみんなは分かってくれると俺は信じている。

「わーい♪ぶつきらぼうだけど優しいクロくんは東ちゃんは大好きだよ」

表情を180°一変させて東も俺の卵焼きをパクつく。  
そつえばこの中で俺の料理を一番楽しみにしてるのって、よく見たら東なんだよな……  
今度なんか作ってやつか。

「やつぱりクロくんの料理は世界一だね。  
さっすが東ちゃんのお婿さん」

「——は？」

いきなりなに言い出すんだこいつは？  
ま、こいつの言う事だから冗談にきまつ——

「な！？ななな、何を言い出すんだ東！！」

で、何故に千冬さんが慌てるし…

「あつれくく？なんでちーちゃんはそんなに慌ててるのかな？  
なんでかな？なんでかな？」

「ぐつ… …そ、それは… …」

千冬さん…俺をチラチラと見ないでください。  
俺に一体どうしろと？

「もしかして、ちーちゃんもクロくんの事が好きなの？」

「なっ！？」

「だあああああ！！その口封じてやる！！」

束の突拍子もない妄言に俺も動揺した。

ち、千冬さんが俺の事… …んな訳ねえ！

第一。俺なんか千冬さんと釣り合う訳ねえじゃねえか！！

「そうなの千冬姉？」

そしたら黒兄が本当の黒兄……じゃなくて黒義兄になるのかな？」

一夏……てめえ……

「面白いこと言うじゃねえかー夏……」

ちよつくら俺と試合……じゃなく死合しようぜ？

久し振りに揉んでやるよ。ボロ雑巾になるまでなあ……」

「く、黒兄！？ボ口雑巾つて……  
…  
…  
てか試合の字が違うよ！？」

「細かい事は気にするな。じきに考えられなくなるから……」  
それに安心しろ。お前には一切の拒否権はない」

「じきにつて怖いよ!？」

あ、足ひっぱらないで！！

戻ってこれなくなる！戻ってこれなくなるから！！」

[illegible]

「いやだああああああああああ！！」

一夏の断末魔をBGMにして俺は道場の中央まで一夏を引きずった。  
楽しみだなあ……久々の私刑……もとい、訓練が出来るぜ………

~~~~~黒羽の訓練~~~~~  
私刑

「そらそらどうしたあ!!」

防ぐばかりじゃ勝てねえぞおお!!」

「ちよつ…無理無理!!」

竹刀が見えな——あああ!!竹刀が切られたあああ!?

黒兄ストップ!ストオオオッブ!!」

「ん~~~~~?」

何言ってるか聞こえないな~~~~~?

おらおらあ!!休んでる暇なんかないぞおお!!!

死にたくなかったら馬車馬のように走れええ!!」

「ひっ!?黒兄!防具に切れ目入ってる!!切れ目入ってるよ!?
これ死ぬ!これ死ぬって!!」

「人は死んで初めて己とはなにかについて答えを見つけられるんだ
よおお!!!!」

「イヤだよ!まだ小3でそんな答え見つけたくないよ!!
できれば60歳からその答えを見つけないよ!!」

「誰が口答えしていいって言ったああああ!!!!」

「いまさらあああああああああ!?!」

~~~~~  
私刑訓練終了~~~~~

「あ~~~~~。スッキリした~~~~」

一夏との訓練が終わってなんだかスッキリしたぜ。

ん？一夏か？一夏なら床でピクピクしながらなんか「あ~~~~~」…」  
とか言ってるぞ。

死んでないし大丈夫だろ。

一夏も存外に頑丈になったな。

今度から束の実験台は一夏にさせっかな…

「——お、黒羽も終わったのか…」

どうやら束の制裁も終わったようだな。

束も床で這いつくばり「プスプス…」…」と湯気が登っている。

「千冬さん…良い仕事してますね」

「ふ…お前もな」

俺たちはお互いに拳をコツンと当てる。

なにかお互いに共有できるものがあると感じた瞬間だった。

「さてと、そろそろ戻るか」

「そうですね」

そして俺たちは道場を出て朝の訓練を終えた  
いまだ床に転がっている存在を放置して…  
…

ちなみにアノ2人は簞が残って甲斐甲斐しく世話をしていたらしい。

## 狂気の夜

あれから約4年の月日が経ち、俺たちは中学生となった。  
え？いきなり飛ばしすぎだった？

だって仕方ねーじゃん。

変わった事があるとしたら、束が世界を変えるような大発明をした。  
その束が行方不明になった。

そして篠ノ之家は一家離散してしまった。

その時に中国から留学生が来た。名前は凰 鈴音。

そして一夏が鈴のフラグを建設した。

とまあ、変わった所はそれだけだ。

ん？多過ぎるじゃねーかって？

仕方ねーな。じゃあ1つだけ、束の発明したやつを説明しよう。

正式名称 インフィニット・ストラトス

略式名称 IS それが束の発明したもんの名前だ。

現行兵器を圧倒的に凌駕する性能を持つ、今や世界最強の兵器だ。

ここまでの説明だと、前の世界の AC を思い出すな。

アレも俺の世界じゃ最強の兵器だったしな。

つと、話しがずれたな。

だが、このISには1つだけ問題があった。

ISは女性にしか反応しないのだ。

今や世界の中核であり要であるIS。

そして、そのISは女性にしか反応しない。

世はまさに男尊女卑ならぬ女尊男卑の世界へと変わってしまった。

おかげでこっちはいい迷惑だぜ。

今や“女性”というだけでISにすら乗れない女性も威張ってきや

がった。

なんか…こういうのは嫌いだ。

努力すらない奴が偉いなんて到底納得できない。

それが許されるのは子供だけだ。

ああいう奴等を見てると前の世界の「ろくでなし共」を思い出す。

「黒羽…少し殺気を抑えてくれ。  
息苦しくて堪らない」

おっと、つい殺気がにじみ出ちゃったみたいだ。  
ちなみに俺の隣にいるのは織斑 一夏。

ようやくコイツも俺を黒兄と呼ぶのをやめてくれた。

あの時は嬉しくて試合中に一夏の防具を真つ二つに斬っちゃった。  
あと数cmズレていたら一夏が死んでいたな…

「おっと、済まん済まん。  
少し考え事をしてな。つい……」

一夏に指摘されてすぐに殺気を収めた。

俺の殺気から開放されて一夏の呼吸も大分楽になる。

「…黒羽の考え事は一々殺気を出すものなのか？  
その殺気を受ける俺の気持ちの事も考えてくれよ……」

「だから済まんって言ってるだろ。」

それに、この程度の殺気で狼狽えるな。  
俺の本気の殺気はこんなもんじゃすまねえぞ」

「マジかよ… …」

「マジだ。本気と書いてマジだ」

全く、一夏は口も達者になってきたな。  
それにこんなシヨボい殺気を受けたくらいで情けない… …  
あ、そっか。一夏はあまり殺気を受けた経験が無いんだよな。

「一夏…帰ったら殺気に馴れる訓練をしような」

「げっ… …」

「なんだ？そのあからさまな嫌そうな表情。  
まあ、別にお前が嫌ならしないがな。強制はしないさ。  
お前の“強くなりたい”と言った言葉が嘘ならな」

「…それを言われたら断れないの知ってるだろ… …  
でもやるさ。確かにイヤだけど、嫌ではないさ」

「よし、素直でよろしい」

そんな話を話しながら、俺達は空港のロビーを出た。  
あ、言い忘れてたが俺達は今ドイツにいる。  
なんでも、IS同士で競うISの世界大会。【モンド・グロッソ】

が、ここドイツで行われることになったんだ。

出るのは勿論、織斑 千冬さん。

ちなみにこのモンド・グロッソはこれで二回目で、第一回のチャンピオンは千冬さん。

ここで優勝すれば二連覇の大偉業だ。

やっぱり千冬さんはスゲえぜ。

千冬さんはブレード一本で世界一の座に登りつめたんだから。

ブレード一本で最強のレイヴンにのし上がった俺を思い出して少し懐かしかったなあ…

…

「さてと、会場は… … あっちか」

会場を見つけるために周りを見渡すと、会場はすぐに見つかった。

野球場を遥かに超える大きさ。

沢山の人が押し寄せ長蛇の列を作っている。

ここが第二回モンド・グロッソの試合会場。

「ほら、さっさと行くぞ一夏。

もし遅れたら千冬さんに怒られる。

お前が怒られるのは別にいいが、俺が怒られるのは困る」

「うわ、サラッとヒドイこと言いやがる」

そんな軽口を言い合いながら俺達は会場へと向かった。

ちなみに俺達は出場選手の親類って事で別口から入れてもらえた。

いやゝ。さすがに俺もあの長蛇の列に混ざりたくなかったから並ば

ずに済んで良かったぜ。

~~~~~

「いや、スゴかったな、千冬さん。」

俺は千冬さんの試合が終わったあとにそう呟いた。

いや、本当にスゴいんだわコレが。

今まで千冬さんの試合はTV中継とかでしか見れなかったんだけど、実際に見てみるとより一層スゴイ。

—— 一機無双

まさにこの言葉がしっくりくる。

他を全く寄せ付けない無類の強さ。

ブレードたった一本で銃器を打ち破る。

その姿は前の俺が戦っていた姿と同じだった。

いや、前の俺は色々と泥くさい戦いをやっていたからそれ以上だな。

「だな。本当に千冬姉はスゴいよ。自慢の姉さんだ」

一夏も俺の言葉に肯定して「うんうん」と言っている。

たった今、準決勝が終わって休憩中。

あと2、30分もしたら決勝戦だ。

相手の方も一応見ていたが、このまま行けばまず間違いなく千冬さ

んが勝つな。

そうすれば世界大会二連覇だ。

「あ、今の内になにか、つまめるもんでも買つか。

黒羽、お前は何かいい？」

「お、悪いな。それじゃあホットドック。それとコーラ」

「あいよ」

そう言つて一夏は売店の方に行つた。

まあ、注文は全部ボタンを押せば頼めるし、言葉も21カ国に対応しているから一夏でも買えるだろう。

にしてもこの会場も中々にスゴいよなあ…

設備は全て現行の最新設備を設置しているし、試合映像は立体映像で投影される。

それに売店の規模もかなりデカイし、ポップコーンから始まりケバブ。

果ては寿司も取り扱っている。

その取り扱っている商品数の多さに沢山のお客が集まっている。

ほら、そう言っている内にまた1人、ポロシャツを着たおっさんも売店に——ッ！？

おかしい…

いま俺の後ろを通り過ぎたおっさんはあまりにおかし過ぎる…
おっさんが俺の後ろを通り過ぎる瞬間…

その一瞬の間に様々な情報が俺の中に入ってきた。

明らかに異常すぎる鉄の匂い。

おそらくは刃渡り20cm程のナイフ。

それに鉛の匂いと一般人じゃ絶対にしねえ火薬の匂い。

それから察するには拳銃。

最初は軍人かと思ったが歩き方や構えが荒すぎる。

このおっさん――

――真っ当な人間じゃねえっ

放置するのはあまりに危険。

この会場には大勢の観客達がいる。

そんな所で乱射事件なんて起こしてみろ。

あつという間に地獄絵図の完成だ。

俺はおっさんに気付かれないように少し離れたところで尾行していた。

~~~~~

俺が尾行を開始してから6分。

ついにおっさんが動いた。

クソったれな事におっさんの目的は一夏だった。

おっさんは一夏を呼び止めて人気のない場所まで誘導して睡眠薬が  
なんかの薬を嗅がせて一夏を眠らせた後、そのまま黒いワゴン車で  
トンスラこきやがった。

俺は人ごみで上手く動く事が出来ず、誘拐を阻止できなかった。

「クソが！こんな事なら一夏に人を見極める訓練をしとけばよかった！！」

だがそんな事を言っても現状は変わらない。

今は“たら・れば”を言うよりも一夏を助けなければ！！

一夏を誘拐した理由はおそらく千冬さんの大会二連覇を阻止するた

め。

この世界大会で優勝した国は他国よりも大きなアドバンテージを得る事になる。

なにせ今はISが中心で世界が回っていると言っても過言ではないからな。

そして千冬さんが大会を二連覇すれば日本は強大なアドバンテージを誇る事になる。

それを快く思わない国はごまんという。

だから唯一の肉親である一夏を誘拐して決勝戦を棄権させるつもりなんだろう。

「だが、そんな事はさせねえ……」

一夏を助けて千冬さんの栄誉も守る。

なにより俺の大切な家族を傷付ける事は何があっても俺が許さねえ

……

そのためなら俺は【狂気の夜】として敵を殺す。

そもそも俺の業はそのためにあるんだ。

「さあ……行くぜ……」

俺は心を絶対零度の冷徹さに変えて、家族を傷付ける奴等を塵殺するため、街中を驚異的な速さで駆け抜け車を追った。

~~~~~

「此処か… ……」

ワゴン車を追ってみれば、会場から少し離れた廃倉庫についた。
最初は追い付けるかどうか不安だったが、この世界大会のおかげで
沢山の車も押し寄せて軽い渋滞状態になっていて思いのほか楽に追
跡できた。

「人数は… ……外に4人…中に6…7… ……8人の計12人か…
…」

俺は地面に耳を当て、その響きから人数を割り出す。

これも前の世界で培ってきた技術だ。

AC乗りにとって…特に有名なAC乗りにとって最も怖いのがAC
に乗る前の襲撃だ。

如何にACを巧く操ってもACに乗らなければただの人間。

かく言う俺も数えるのが億劫になるくらい襲撃を受けた。

それにACじゃ活動出来ないような所でミッションもやっていたし
な。

これくらい出来て当たり前だ。

「さてと… ……1人を殺してからチンタラしてると中にいる奴等に
怪しまれて一夏が危険になる。

まずは1人。そのあと速攻で他の奴等も片付ける」

見た感じ、常に無線でお互いを確認しあっている様子はない。これで難易度は更に低くなった。

だが、軽くみない、慢心はしない。自分の持てる力を全て出す。迷いはない、躊躇しない。一切の後悔もなく相手を殺す。

今の俺は世界最狂の【狂気の夜】なのだから…

「ん？…なん——ガッ」

ワザと物音を立てて男を誘き出し、即座に男の背後に着いて首の骨を折る。

そしてすぐに男の武器を奪う。

まず、刃渡り20cm程のナイフ。

そして拳銃はベルギーのFN社開発のF i v e - s e v e n。ファイブ・セブン

装弾数は20発でマガジンが2個。

確か、貫通力が高すぎるって理由で政府組織か法執行官しか販売されてない筈だ。

よくもまあ、こんな危ないもん手に入れたな。

だがこれで手持ちが楽になった。

まずは1人。ここからは時間の勝負だ。

なに、俺は暗殺任務を請けおっていた事もある。

馴れたもんさ…

「——あがつ」

2人目は後ろに回って喉元をナイフで切り裂き…

「——がは」

3人目は1人目と同じように首の骨を折り…

「——ぐふっ」

ラストは喉にナイフを投擲し絶命…

男達は叫ぶ暇なく死んだ。

ここまでで要した時間は1分未満。
な？ 馴れたもんだろ？

「後は中にいる奴等を殺すだけ。
試合開始まであと15分ちよい。

いや、決勝戦だから確か挨拶があつた筈だ。
それを考慮して約30分。お釣りが返ってくるぜ」

俺はより一層気を引き締めて、倉庫の中へと歩みを進めた。

一夏side

「……くそ」

俺は自分の不甲斐なさに憤った。

売店で買い物をしている最中に俺は誘拐された。

誘拐犯の話しを盗み聞きした所、どうやら千冬姉の優勝を阻止するために俺を誘拐したみたいだ。

これじゃあ千冬姉に迷惑をかけちゃうっ

なんのために… なんのために俺は今まで鍛錬してきたんだっ！！

「
…
…
…
ッ」

俺は悔しさのあまり唇を噛み締める。

情けない… あまりにも情けない…

自分の無力さに腹が立つっ…

「—— お、おい！ なんだデメエ—— ガハッ」

すると、突如男達が声を荒げた。

俺も何事かと思つて視線を向ける。

そこにいた人物は——

「—— よお、一夏。

俺のホットドックとコーラはどうした？」

俺が…俺達が最も懂れる人物。
その強さを目標としている俺の兄貴分。
真鴉 黒羽だった。

黒羽side

「———よお、一夏。
俺のホットドックとコーラはどうした？」

これと言った策が見つからず、俺は正面きって入ってきた。
ちなみに最初に声を出したヤツは喉切って殺した。

「な…なに馬鹿なこと言ってたんだよ！？
この状況見てからもの言え！！」

む？ジョークを言って和ませようとしたが怒られた…
一夏はもう少し柔軟な脳みそとジョークを受け止めるデカイ器をだ
な———

「テメエ、なにもんだ！？
どこから入ってきやがった！？」

そしてなに人が考え事してる時に話しかけてきてんだお前は。

しかも質問の内容が頭悪すぎんだよ…

「どこからって…見ての通り正面からだろ」

「み、見張りがいた筈だぞ！！」

「んなもん殺したに決まってるだろ…」

お前頭悪すぎ…」

はあ…

なんか見た感じこいつがボスっぽいな…
超小物だな。そういえばあまり時間が無いんだった。

——よし、すぐに殺そう…

「うるせえ…」

《——パンツ》

俺の腕から乾いた破裂音が響いた。

それと同時に男の頭から赤い液体とピンク色したゼリー状のものが飛び出した。

そして遅れること数秒。男はもはや血と肉が詰まった、ただの袋として地面に落ちた。

「そ、そんな…ボス…」

やっぱりこいつがボスで間違いなかったみたいだな。
下っ端どもが慌ててやがる。

「お、俺はもう下りる！これ以上付き合ってられねえ！！」

「そ、そうだ俺も！！」

おいおい…

ボスが死んだ瞬間に尻尾まいて退散かよ…

まあ、頭が死んじゃ確かに終わりだろうけどよ…

——この狂気俺の夜が許す訳ねえだろ…

「なに巫山戯たこと言ってるやがる…
デメエら全員皆殺しに決まってるだろ…」

それから乾いた破裂音、計6回。
後に残ったのは俺と一夏だけの2人となった。

「さてと、これで終わり。

一夏。怪我不い——」

「何でだよ……」

「ん？どした？」

「なんでそんな簡単に人を殺せるんだよ！？
なんでいつも通りに笑っているんだよ！？
人を殺したんだぞ！？」

「………一夏——」

「く、くるな！！」

「——ッッ！——！」

その目……

拒絶の意思が込められた目……
俺はその目を知っている……

——あの目は俺を恐れている目だ。

前の世界で助けてきた人達に散々浴びせられた目だ。

そっか…そうだもんな…

人を平然と殺す俺が恐くない訳ないよな…

例えこの世界でも…いくら善人面しようと…所詮俺は人殺し。

この手は血の色に染め上げられている。

今更……覆しようがない……

「……分かった」

長い沈黙のあと、俺は一夏にナイフを投げる。

「それを使つて早く会場に向かえ。

千冬さんが心配する」

こうなつた以上、もう俺はここには戻れない。

別に皆んなのヒーローになりたかつた訳じゃない。

恨まれるのも拒絶されるのも馴れた。

あとは俺が消えればそれで全て収まる。

時間はあと20分以上ある。

歩いても充分に間に合うから大丈夫だろう。

俺は一夏に背を向けて歩き出そうとした、その時――。

「――へえ……随分と凄くないか。餓鬼」

突如空から声がした。

俺が空を見上げると、そこには――

「I……S……」

八本の脚を生やした。まるで蜘蛛を思わせるような機械。
世界最強の兵器。ISが俺の目の前にいた。

撃たれる鴉（前書き）

オータムのアラクネって画像とかで出てないんですかね？

なんかよく分からないから妄想で書いてしまいました。（いつも妄想だけど．．．）

あと、オータムのキャラも上手く把握出来ませんね．．．

Wikipediaだと口が悪くて短気としか書いてなかったの
で．．

まあ、いつも通り妄想100%で書いてますので、どうぞ。

撃たれる鴉

黒羽 side

(マズイ………)

俺は目の前の相手を見て焦っていた。

まさか現行兵器最強を誇るISが出てくるなんて想定外すぎる。

だが、それ以上にヤバイのはISに乗っている女の方だ。

肉食獣を思わせる獰猛な目。体から漏れだす血の匂い。

この女……俺と同じ「ろくでなし」だ。

人を平気で殺す、度し難い「狂人」

この手のヤツは目的のためなら息をするかのように人を殺す。

俺と同じでな……

「一夏……そこに置いてあるナイフを使ってすぐに逃げる……」

「え……？」

「いいから早く逃げろ!!死ぬぞ!!」

俺は声を荒げて怒声を飛ばす。

相手の実力は未知数だが伊達に世界最強の兵器を名乗っている訳ではない。

相手の目的次第では一夏は死ぬ。

それだけは何としても避けなければいけない。

「——んな事させつかよ」

だが、その願いは叶わなかった。

女のISから突如爆音が鳴り、ナイフは跡形もなく吹き飛んだ。

「はっ、餓鬼の小細工が通用する訳ねえだろ」

「・・・・・・クソ」

「その織斑一夏つてえのは今回の依頼の要でな。

逃がさず、殺さずに、つてのがウチのスポンサーのご要望だ。

逃がすつもりはねえよ」

・・・成る程・・・これはいい事を聞いた。さっきの情報
は勝機の光だ。

この女は一夏を殺すつもりはない。

なら、戦略の組み立てが可能だ。

大丈夫だ、勝てる。勝利の糸は確実に手繰り寄せれる。

「だがそれ以外は特に指示されてねえ。

だから餓鬼。死んでくれや」

女は凶暴な笑みを浮かべてその八本の脚を俺に向ける。

上等．．．お前的人格、性格は理解した。

これで勝利の戦略は完成した。後はお前を引き寄せるだけだ。

「おもしれえこと言うな小娘。」

なにそんな程度のオモチャ持ったぐれえで悦に浸ってんだよ。

ようやく飛べるようになった雛鳥風情が大鴉に勝ったつもりか？

おら来いよ、さっさと来いよ。格の違いってヤツを教えてやる」

「デメエ．．．．．餓鬼ツ．．．．．殺す！！！」

よし、乗った．．．．．

これで策の第一段階は終了だ。

後は期をみて随時次の段階に引き込む。

兵器は所詮兵器であって、戦闘のアドバンテージには足り得るが、それ単体が戦闘の勝敗を決めるものではない。

その事を俺が教えてやるよ。同じ「狂人」の先輩としてな。

勿論授業料はお前の命で払ってもらうぜ．．．．．

「さあ来な！かわいい雀ちゃん！！」
スパーロウ

その羽を筆取り取ってやるよ！！

精々チュンチュンとかわいく囁っているんだなあああ！！！！」

「言ってるや餓鬼があああああ！！！！」

女はより一層怒りを露わにして俺に向かってくる。
こうして世界最強の兵器ISと、世界最狂の狂気の夜との戦いが幕
を開けた。

s i d e o u t

「——死ねや餓鬼イ!!」

まず戦闘の口火を切ったのは女の方だった。

女は黒羽に向かって一直線に飛び、その、人を殺すのに充分過ぎる
凶器である脚で黒羽を串刺しにせんとして突き刺す。

だが女の使用する脚の数は一本。

それは人間の相手ごときに本気を使いたくないという彼女のプライ
ドか、或いは人間程度の敵に本気を出すまでもないという彼女の慢
心か、それは彼女自身にしか分からない問いだろう。

わかる事はただ一つ。黒羽相手にその行動は軽率だったという事だ
けだ。

「なんだ？攻撃なのか、それ？」

黒羽は体を捻って女の刺突を回避する。

そして女に向けて容赦なく銃を突き付け引き鉄をひく。

発砲音の数は計6つ。

頭に2発、心臓に2発。凶悪犯罪者を一瞬で射殺するために主にアメリカで使われてる射撃法（コロラド撃ちと言う人もいる）で、そして2発は脚の関節部分に外れてしまった。

「っ．．．んの餓鬼やああ！！！」

だがISが最も誇るものは使用者を守るその防御性能。

女に向けられて放たれた弾丸は女に届く事なく、シールドに阻まれて力なく地面に落ちた。

女は自分の攻撃が躲され、そして逆に攻撃された。

この屈辱的な2つの出来事によって更に憤慨の表情をみせる。

女は自分の憤怒の感情をその脚に乗せて、黒羽を潰そうと大きく脚を振り下ろす。

「おいおい、子供のお遊戯か？」

その必殺の一撃を黒羽は嘲笑を浮かべて避ける。

そしてお返しだと言わんばかりに銃を撃つ。

頭、喉、そして心臓。数発は脚に当たってしまったがその攻撃は全て急所を狙い澄ましていた。

「はっ、なんだその動きは？」

お前ヤル気あんのか？

まさか戦闘^{ヴァーシ}処女じゃねえだろうな？」

黒羽は銃のマガジンを変えながら女を挑発する。
その顔はまさに嘲りの表情だった。

「殺す．．．．．殺す．．．．．殺す．．．．．殺すッ
！！！！

テメエだけは殺す！！絶対に殺す！！何があっても殺すッ！！！」

女の顔はこれ以上ない程に憤怒の表情で塗り潰されて歪む。
女の口から吐き出される言葉はもはや呪詛となっていた。

これが．．．これこそが黒羽の策だとは思わずに．．．．．
ズルズルと、ゆっくりに．．．女は黒羽の術中に落ちて行く．．．
．．．

「好い加減に死ねやああ！！！」

女はありつたけの憤怒を乗せて黒羽を叩き潰す。
だが女の攻撃は感情が大きくなるのに比例してどんどん大振りになっ
ていく。

「遅えよ。阿呆」

だがそんな予備動作見え見えの攻撃など躲すに容易い。

黒羽は難なく避けて銃を撃つ。

女が脚を振り下ろした地面には小クレーターが出来上がり、女の攻撃の威力の高さを物語っている。

だが黒羽には当たらない。

一発さえ当たればすぐに終わる。だけどその一発が当たらない。

それが余計に女を苛立たせる。

「戦闘処女ヴァージンって言われてキレたか？
ブレイガール

戦闘殺人者を証明したいなら俺を殺してみろよ。

さあ、俺はここにいるぜ。お前の眼前に立っているぜ。俺を殺してみな。

お前に．．．お前程度に出来るんだったらな．．．．．」

「こ．．．こんつの餓鬼がああ．．．．．

こつちが下手に出てりゃ調子に乗りやがってえええ．．．．．

舐めくさんのも大概にしるやああああ！！！！」

もはや女の感情は憤怒とは呼べず、それは憎悪にまで膨れ上がっていた。

こめかみは痙攣を起こし、血管はもう破裂寸前。

女はもう冷静な判断を下せない状態まで掻き回されていた。

これが黒羽の狙っていた策だった。

黒羽はこの女がかなりの激情家だという事を見抜いていた。

だから黒羽は女をこれでもかと言っくくらいまで怒らせて攻撃を単調にさせたのだ。

『激情は最大の敵。冷静は最高の戦友也』とは誰の言葉だったか．．

．．．

黒羽は見事に『冷静』を戦友に、『激情』を相手に差し向け、勝てない相手を、勝てる相手にまで引き下げたのだ。

だが、言うは易く行うは難し。

黒羽の行っている行為は超危険な綱渡り。

一歩間違えれば己が人体ミンチになるような事をやっているのだ。そんな事をして冷静でいられるのは彼が培った経験の賜物だろう。

「やめだ．．．もうやめだ！！」

これ以上テメエに付き合うつもりはねえ！！

こっからは本気でぶち殺してやるよ！！」

だが、これ以上コケにされれば女も黙ってはられない。

黒羽への憎しみのために、このどうしようもない殺意を鎮めるために、女はとうとう背中にある全ての脚を黒羽に向ける。

今までは一本だったから何とか立ち回ってきた。

だが、今やその数は8倍の八本。

いくら女が冷静な判断を下せない状態でも、その数を増やせば補うに余りある。

黒羽の勝率はもはや0に近いと、誰が見ても思っだろう。

だが．．．．．

「――ニイ」

黒羽は静かに、一瞬しか分からなかったが確かに笑った。
まるでこの展開が初めから分かっていたかのように．．．
こうなる事を待ち望んでいたかのように．．．

「それがお前の本気か．．．いいぜ。来いよ」

もう女を挑発する必要がなくなったのか、黒羽の語気は幾分穏やかなものへと変わった。

黒羽は手に持った拳銃を捨て、代わりにナイフを二本手に持つ。
そして女に悟られないように静かに息を整えていく。

「これで．．．終わりだああ！！！」

女はこれで終わりだと思ったのだろう。

その顔には歓喜の表情が浮かんでいた。

それはそうだろう。女がこれから繰り出す斬撃の数は8つ。
対して黒羽の斬撃の数はどこをどう見ても2つ。

この構図を見れば小学生でも女が勝つと分かるだろう。

目の前に厳然とある現実を覆しようがない。

黒羽を斬殺せんと八方向から“現実”が襲ってくる。

だが――

「――せやあつつつ！！！！！」

“現実”は“奇跡”の前に呆気なく消えた。

黒羽は一息の内に4本．．．計8つの斬撃を生み出した。

その8つの“奇跡”は、女の8つの“現実”を弾く。

彼の十八番である弾く斬撃だ。

だが、その奇跡の代償として、ナイフは粉々に砕け散った。

ISと普通のナイフでは材質から根本と異なっただために砕けたのだろう。

そのまま黒羽はISの横に潜り込み．．．．．

「——コレ、貰うぜ．．．．．」

あろう事がISの脚を？ぎ取った。

まず黒羽はISの脚を脇に挟み、そのままグルンと縦に回って、まるで蜘蛛の脚を捻じり切るかのように？ぎ取った。

「なっ！？．．．．．なんだと！？」

女もさすがにこの常識外の出来事に目を丸くした。

絶対の好機であり、確実に仕留めるはずであった8つの斬撃。

それを無情にも弾かれ、次に主武装である装甲脚が破壊されたのだ。それも生身の人間がだ。

女の頭の中は混乱でグルグルになっていた。

だが、これにはちゃんとタネも仕掛けもある。

いくら黒羽が人間離れた技術を持っていたとしてもISの装甲を破壊する事は不可能だ。

そこで皆んなに思い返してほしい。
不思議に思わなかっただろうか？

あの黒羽の精密すぎる射撃。寸分変わらず急所を狙い撃っていた。
なのに何故、時折黒羽の弾丸は外れていたのか。

黒羽の腕なら全弾急所に当てる事も可能だった。

だが黒羽の弾は外れた。しかも外れた場所は全て脚の関節部分。 . . .

もうお気付きだろうか？

黒羽の弾は外れていたんじゃない。しっかりと命中していたのだ。

——最も弱い関節部分に

そう、急所への射撃は全てフェイク。

本当の目的はこの脚を奪う事だったのだ。

それを悟られないために急所への射撃を繰り返していたのだ。

ファイブ・セブン

黒羽の使った拳銃はFive-sevenという拳銃。

弾の形はライフル弾をそのまま小さくしたような形で先端は鋭く尖り、100m離れた所で撃つてもボディーアーマーを貫通しうる程の高い貫通力を誇っている。

それをゼロ距離で十数発も受けたのだ。しかも最も弱い関節部分に . . .

いくらISでもそれは耐えられなかったのだろう。

結果、黒羽によって脚は？ぎ取られてしまった。

「ほお . . .これがISの武装か

俺の使う大太刀と同じ長さだな . . .じっくりくる」

黒羽は脚だったものを掴み、確かめるように振る。
どうやらお気に召したようだ・・・

「さてと．．．これでお前と同じ土俵に立ったって訳だ．．．
．．．そんなじゃま．．．行くぜ？」

黒羽はここが最大の勝機と悟ったのか、初めて自分から相手に向かう。

その大太刀を携える姿はえらく堂に入っていた。

「く、来るな！来るんじゃねええ！！」

女の顔にはもはや恐怖しかなかった。

女は黒羽の策が分からなかったから力だけでISの脚も？ぎ取ったのだと思ったのだろう。

ここまでくれば体裁なんか関係ない。

残った七本の脚を黒羽にむけて銃火器を乱射する。

だが黒羽は前に一夏にこう言った事がある・・・

——もっと全体を見るように心掛ける。

「そうすれば剣だろうが銃弾だろうが余裕で避けられる」と。

そして、その言葉は違える事なく現実のものとなった。

「うおおおおおおおっ!!」

黒羽は雄叫びを挙げて弾雨の嵐に突っ込む。

普通ならあつという間に八子の巢にされ、自らの血肉が辺りに散乱するだろう。

だが黒羽は当たらない。その鉛弾が押し寄せる死の嵐を黒羽は避ける。

必要最低限の動きで躲し、時には大太刀で防ぎながら、黒羽は不回転の覚悟を以って突き抜ける。

「これでっ……」

「ひっ!？」

そして黒羽は女の眼前に立ち、大太刀を振り上げた。

女は残る七本の脚を総動員させて黒羽の攻撃を防ごうとする。

相手の一に対してこちらは七。純粋な質量差ではこちらが圧倒的に上だった。

だが黒羽は、もう一人の幼馴染みである箒に以前こう言った事がある。

『——力を抜けば抜く程、剣の一撃は鋭くなり重くなる。その気になれば鉄塊をも斬る事が出来るぞ』と。

そして、その言葉も違う事なく現実のものとなった。

「――終わりだあつ!!!」

「がはっ！」

振り下ろされる白刃の一閃。

ISの七本ある装甲脚は一閃の下に切断され、衝撃はそのまま女に伝わり吹き飛ばされ、壁に激突した。

「はぁ．．．はぁ．．．。これでチェックメイトだな」

黒羽は数呼吸して息を整え、止めを刺すために女の方に歩み寄る。

「クソが．．．何だつてんだよ．．．．．お前は一体何なんだよ!?!」

「．．．おれはただの狂人さ。お前と同じな。守りたい大切な人達のために人を殺す度し難い狂人さ」

「守りたい．．．だと?あの小僧の事か? あいつはお前を否定したんだぞ。なのに何故お前は守ろうとする!?!」

「．．．．．例え一夏が俺を否定しても、俺にとっては守りた

い存在である事には変わらない。だから俺は守る」

女の言葉に一瞬辛そうな表情をする黒羽。

おそらく拒絶された時の事を思い出したのだろう。
だがそれでも彼は止まらない。

「——守りたい・・・か。ならこんなのはどうだ？」

「ッ!？」

黒羽の言葉を聞き、女はこれまでの表情を一変させ、喜色の色を浮かばせて凶笑する。

ISの特徴の1つとして、武器を量子化して機体に保管できる能力がある。

女の手には光の粒が集まり、やがて1つの銃器となった。

「守ってみせな。狂人」

そして女は引き鉄を引いた。

あろう事が殺すなと言われた一夏に向かって・・・

一夏side

——怖かった。

なんの躊躇いもなく、当たり前のように人を殺す黒羽が怖くてたまらなかった。

例え俺を助けるためだとしても、逃げた誘拐犯まで殺すのは俺には到底理解できなかった。

そして俺は黒羽を拒絶した。

もしかしたらそこで俺は殺されるんじゃないかと思ったけど、黒羽は俺の側にナイフを投げてそのまま立ち去ろうとした。

その時、いきなりISが現れた。

もう駄目だ………

世界最強の兵器ISが出てきた瞬間、俺はもう助からないと諦めた。

だけど黒羽は諦めていなかった。

黒羽はISと向き合い、真っ向から勝負した。

無謀だと思った……。いくら黒羽でもすぐに殺されると思った。

でも黒羽は生き残っていた。

ISの攻撃を紙一重で避け、その隙に銃を放つ。

一撃即死の嵐に身を置きながらも、黒羽は終始戦いを有利に進めていた。

そして、なんと黒羽はISの脚を？ぎ取ったのだ。

その？ぎ取った脚を大太刀にして、黒羽はISに突っ込んでいった。

ISは銃火器を乱射したが、黒羽はその弾幕を避けてISの目の前に立ち、七本の脚を一刀の下に斬り伏せた。

以前、黒羽が言っていた『——相手をよく見れば銃弾だって躲せれる』や、『——その気になれば鉄塊だって斬れる』を思い出した。

あれは全部本当の事だったのか．．．

黒羽はISの方に歩み寄る最中、操縦者の女となにか言い合っていたが、ここからだとしき聞き取れなかった。

そして、あともう少しの所で黒羽がISの所に着こうとした時、女は突如銃を取り出して俺の方に照準を向けた。

俺は縛り付けられてて動けない。

引き鉄を引かれれば俺は間違いなく死ぬだろう。

色んな出来事が走馬灯のように頭を駆け巡った。

ISの方から発砲音が鳴り響き、俺は無駄だと分かりながらも目を瞑った。

「．．．．．」

おかしい．．．

さつきから全然衝撃が来ない．．．

もしかしてもう死んだ？

いや、それだったら縛られてる感覚もなくなっている筈だ。

という事はまだ俺は生きている事になる。

（一体なにが．．．）

そう思い、俺は恐る恐る目を開けた。

「なっ！？．．．．．そんな．．．．．」

そして俺は目の前にある光景を疑った。

「．．．．．く．．．．．ろう．．．．．」

俺の目の前には体からおびただしい程の血を流し、足元に血の池だまりを作りながら、黒羽が直立不動で立っていた。

「な．．．なんで．．．お前が．．．．．」

「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

俺の問いかけに黒羽は答えない。

その代わりに赤い雫が池だまりに落ちて音を出す。

「ア．．．ハハ．．．．．アッハッハッハハハハ！！！！
こいつ．．．本当にこの小僧を守りやがった！！」

女は狂った笑い声を上げる。まるで面白い出来物を見ているみたい

それよりもこの女は何を言った？守る？

「そんな．．．．．それじゃあもしかして．．．．．」

「ああそうさ！こいつはお前を守るために身代わりになったんだ。

「守りたい人」とか抜かしながらな．．．。

良かったな小僧。この馬鹿のおかげでお前は助かったんだぜ．．．。
クックククク．．．．．」

そんな．．．。黒羽は俺を守るために．．．。
黒羽を拒絶した俺なんかのために．．．。
なんで．．．．．なんで．．．．．。

「おっと、もうこんな時間か。
これで取り敢えず依頼は完了だ。
じゃあな、糞餓鬼ども」

それだけ言つて、女は逃げていった。
後に残ったのは縛られてる俺と、血に濡れた黒羽だけだった。

「．．．．．黒羽．．．．．なあ、黒羽．．．．．
」

俺は黒羽に呼びかけるが、黒羽は答えない。

黒羽は俺を守るために身代わりになった。

それなのに．．俺は黒羽を怖れていた．．拒絶してしまった．．
．．．

後悔と自責の念が俺の頭の中をグルグルと駆け巡る。

「黒羽．．答えてくれよ．．なあ、黒羽っ．．．．」

黒羽に謝りたい．．．

怖がった事を謝りたい、拒絶した事を謝りたい。

俺を守ってくれた事に感謝したい．．．

俺の目から涙が流れてくる。

でも黒羽は答えない、答えてくれない。

まるで死人みたいに――

「あ．．．．．」

そう思った瞬間に俺の中のナニカが決壊した。

黒羽は．．黒羽は．．黒羽は．．黒羽は．．
俺を守るために．．．

死んだ
・
・
・
・
・
・
・
・
・

まるで壊れたダムみたいに様々な感情が押し寄せ。
俺の精神は崩れた。

撃たれる鴉（後書き）

黒羽、黒羽って．．．なんか流し読みすると関羽って見えませんか？
え？違う？そうですか．．．．．

取り敢えずこれで一回戦闘描写は終わりです。
拙い文でしたけど如何でしたか？

あと、ISって武装に対しての攻撃にシールドって張りましたっけ？
漫画だとよく分からないんですよ．．．．．
もし武装に対してもシールドを張るのならこの戦闘は矛盾しますが、
そこは突っ込まないでください。

あと一話書いたら本編に突入させるつもりです。
作者お得意のご都合主義で。
それでは皆さん。また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7323x/>

最後の鴉は何を思って飛ぶ...

2011年10月21日13時09分発行